

平成29年度 県立阪神昆陽特別支援学校 学校自己評価シート

教育目標  
 1 設置趣旨及び本県が目指すべき4つの人間像を踏まえた、生徒一人一人の「生きる力」の育成  
 2 併設の阪神昆陽高等学校との交流及び共同学習の推進  
 3 オープンスクールや清掃活動等を活用した地域に愛される学校づくり  
 4 教職員の豊かな人間性や専門性、実践的指導力の向上

学校経営方針  
 (1) 阪神昆陽高等学校は、生徒の興味・関心や、多様な学習ニーズに応じて、主体的に学ぶことができる多制単位制高等学校である。一方、阪神昆陽特別支援学校は、生徒の社会的・職業的自立を支援するための、職業教育に重点を置く高等部の特別支援学校である。それぞれの学校が、それぞれの設置趣旨に従って、校訓「日常実践」のもと、一人一人の生徒の「生きる力」、すなわち「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む。  
 (2) 両校は、同一敷地に設置されたメリットを最大限に生かして交流及び共同学習を推進し、ふれあいを通じて豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校をめざす。また、両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。  
 (3) 学校評議員制度や高校生ふるさと貢献活動事業、特別支援学校交流・体験チャレンジ事業などを活用して伊丹市池尻地区や尼崎市西昆陽地区など、学校周辺の地域と連携した教育活動を推進し、また、近隣の幼稚園、小学校との幼小高連携を通して、地域に開かれた、地域に愛される学校をめざす。  
 (4) 「教育は人なり」という言葉があるように、両校の教職員は、教育の専門家としての使命感と高い倫理観を保持し、豊かな人間性の涵養に努める。また、専門性と実践的指導力の向上や、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざして、研究と修養に努める。

評価点：十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	自己評価					成果	課題	改善策	学校関係者評価委員意見
				平均	4	3	2	1				
開かれた学校づくり	保護者・地域等への情報発信等	1	ホームページや各種通信等により、適宜、保護者・地域への情報提供を行う。	3.2	28.6%	65.3%	6.1%	0.0%	・警報が出たときのホームページの更新や羅針盤(学校だより)で、適宜、情報提供を行うことができた。 ・時期に合わせた発信ができていたと思う。	・発信はできているが、受信されているという実感がつかめない。 ・HP等を活用する生徒、保護者、卒業生を増やす必要がある。 ・ホームページから情報を得る県民、保護者、生徒も多い中、学校の教育活動の様子を定期的に情報発信できていない。	・業務的に見るのではなく、見たいと思うものを作るようにする。 ・来訪者のカウンターを設ける。 ・校長ブログは校長先生からの発信で他の教師が掲載しにくい。学校ブログを設け、担当者も決めて定期的に情報発信をする。特に進路に関する情報発信を増やし保護者に情報提供をする必要がある。	・カウンターを設けるだけでなく、投稿内容にどう反応するか分析が重要である。またSEO対策(検索結果で本サイトを多く露出させるために行う対策)も行う。 ・校長ブログの担当者を決め、掲載してもよいのは、
		2	学校説明会やオープンスクール等を実施し、学校の取組等について必要な情報提供を行う。	3.3	42.9%	49.0%	8.2%	0.0%	・兵庫県電子申請共同運営システムを使用し、オープンスクールの出席を管理することができた。	・学校説明会やオープンスクール時の学校見学について、見学者がもっと理解しやすい工夫が必要である。	・授業テーマを白板に書く、急な授業場所の変更は極力避ける、窓を開ける等する。	・学校評議員の活用の自己評価が低いので、今後どのように活用していくかが課題である。 ・学校評価は、年間最低2回は実施する。 ・昨年度と同じ学校評価の項目であれば、比較しただけ良くなったかが分かる。評価の方法も、どうすればよくなるかを聞く内容にする。
		3	設置趣旨を踏まえ、学校の教育活動等について、県内のみならず他府県等にも、広く情報提供を行う。	3.1	30.6%	53.1%	14.3%	2.0%		・学校説明会やオープンスクールの日毎の人数のバラつきがあった。	・市町の割り振りを今年度を参考に更に平均化を図る。	・改革は意識から始まる。
	学校評議員制度等の活用	4	学校評議員会を定期的に実施し、意見聴取等を通じて学校運営の改善に活用する。	3.0	22.4%	57.1%	18.4%	2.0%				
		5	学校評議員の学校行事等への参加を通じ、教育活動等の改善を図る。	3.0	12.2%	73.5%	12.2%	2.0%				
円滑な学校運営	各種会議等の実施及び連携	6	学年会や各委員会等を適切に実施し、職員の共通理解を図る。	3.3	37.5%	54.2%	6.3%	2.1%	・意見が出しやすい環境で、共通理解を深めることができた。(他1)。 ・必要に応じて、職員朝礼で連絡したり、臨時で集合することができた。	・学年会が特に長い。(他1) ・まだ、時間内に会議が終了できない場合があるので、スムーズな運営が必要。 ・情報共有はできたが、全体への周知は報告のタイミングが遅かったり、内容が詳細ではなかったことがあったので、迅速に的確に伝えることが今後の課題である。	・勤務時間内に終わらせようとする意識が必要である。 ・内容にもよるが、朝礼等で事案があることなどを伝え、文書を回覧もしくはデータで情報共有する。(ただし、ペーパーだと資料が無駄だし、データだとすぐに見えない可能性がある。また、文書として残すことは、非常に手間になることもある。)	・時代は完全にペーパーレスである。先生方の整理術とシステムが重要である。
		7	校務運営委員会や職員会議等を通じ、学年・委員会等の意見調整を行い、円滑な校務運営を推進する。	3.2	32.7%	55.1%	12.2%	0.0%		・臨時的な会議を弾力的に入れることができた。 ・臨時的な会議が多くなった。		
勤務時間の適正化	業務のICT化・効率化	8	グループウェア等、ICTを活用し、各種業務の効率化を図る。	3.2	32.7%	51.0%	16.3%	0.0%	・机上のPCで、成績の処理ができるようになり、業務が円滑になった。(他1) ・今年度は、教師パソコンをドメイン管理し、セキュリティを強化した。 ・実践集のペーパーレス化が実施された。			・ICT活用を進めていくうえで、職員の年齢構成も関係してくる(年配の職員は苦手意識がある可能性等)
		9	教職員定時退勤日(ノー残業デー)、「ノー部活デー」、「ノー会議デー」の設定等により、教職員の超過勤務の縮減を図る。	2.7	14.3%	53.1%	22.4%	10.2%	・管理職からのこまめな呼びかけにより、勤務時間の適正化を意識して取り組むことができた。 ・少しずつ職員が早く帰るようになってきている。	・仕事を進んでる人、できる人、頼みやすい人に仕事が集中しているように感じる。 ・職員室がうるさいので仕事に集中できない。	・業務の分担を適切に行う。 ・業務に必要な会話、小声もしくは職員室の外で行う。 ・主任・部長もできるだけ早く帰るように努める。 ・年休は、テスト期間に懇談が入るので、普段は消化しにくい。テストと懇談を分けるのも一つの方法である。	・他の特別支援学校のようにスクールバスで児童生徒が一緒に下校しないため、放課後も忙しいのかもしれない。仕事の円滑を図るために、クラス担任のベアリングを考えていく。 ・年休の取得率は、他の学校と比べ多い方である。クローラーを止めることで気兼ねなく年休がとりやすくなるような工夫を行ってはどうか。教師が、リフレッシュのため年休の取得を進める。教師の体調が良くなければ、子どもの教育に影響する。
生徒指導	生徒指導体制の充実	10	社会的ルールやマナーについての教育を徹底し、社会的自立を図る。	3.1	16.0%	76.0%	8.0%	0.0%	・色々な面で働く人になるためにどうするのがよいかを考えることで自分を律することができた生徒もいる。	・校外での友だち関係の中で起きるトラブルがあまり見えてこないことにより問題が大きくなってしまっている。 ・特別指導における指導内容が練られないまま行われている。指導の方向性、方法を周知し、一貫性、系統的な指導を行わなければ指導効果が期待できない。(他1)	・休日の過ごし方等について生徒が素直に言える教師との関係づくり。 ・社会のルールに根ざした学校のルールを作ることが大切。特別支援学校なので、それに従って個々への対応をするべきである。一律のルールの押し付けは生徒や保護者からの不信感を生む。 ・アンケートでは見えてこない部分をどのように見つけて事前に防いでいくのか。	・ルールは人をコントロールするためにつくるべきではない。コントロールすると必ず反作用が生じる。 ・全国的な傾向として、特別支援学校では、いじめが増えている。生徒によって、いじめの認識や感じ方が違う場合がある。いじめ認識のアンケートを年に1回実施する。アンケートを集計し、データにする。教師は、生徒の考え方を把握でき、生徒にHRや総合的な時間に議論させ、いじめの内容について考えさせることができる。アンケート実施後は、気になる生徒の面談だけでなく、全員に面談を実施し、考えを聞くことでいじめについて考える機会となり、アンケートが生きてくる。
		11	いじめの未然防止を図りながら、いじめの早期発見、適切かつ速やかな解決を行う。	3.2	28.0%	68.0%	4.0%	0.0%	・いじめアンケートの方法をPTAとも意見交換し、学校評議員会の意見を踏まえ変更した。			
		12	生徒の卒業後の生活を見据えた生徒指導を行う。	3.2	24.0%	68.0%	8.0%	0.0%	・卒業後の生活を見据えた指導内容が実践できた。			
学校運営	進路指導体制の充実	13	生徒の卒業後を見据えた進路指導計画を作成する。	3.1	22.9%	62.5%	12.5%	2.1%	・生徒の卒業を見据えた教育課程のもと、進路指導を行うことができた。(ビジネス総合などの取組) ・職業体験を中心に事前事後と意識を高めることができた。	・生徒は、卒業後就職するという漠然とした意識はもっているが、進路決定までのプロセスは指導しておらず理解できていない。 ・本人・保護者・担任・進路指導部間の進路指導の方法性や生徒の実態や能力の共通認識が十分でない場合、進路指導が難しくなる。(他3) ・3年生の前期の結合実習(6月)が本当にその生徒にあったものになっているのか。その話し合いがとても大切なので、2年生のうちに進路を実現していくという意識を教師・生徒共に持ち、行動していくことが必要である。 ・進路先(結合実習先)の決定については、今後公開に耐えうる客観的根拠が必要になるのではないかと。 ・求人紹介手続きの明確化。保護者から「その手続きを知りたい」と聞かれた場合に教師が答えられるだろうか。 ・わたしの学習計画の活用について、使い勝手が悪い。 ・市によって対応が違う。(卒業後でよい、何か問題があれば連絡するなど)	・進路ワークショップも良いが、もっと定期的に卒業生の動向を在校生に紹介し、「自分も先輩のように働きたい」と思わせる必要がある。 ・学年会などの協議および質疑応答ができる場での情報提供を行う。 ・今まで以上に進路関係に関する学習や相談時にはお互いの思い込みでなく、生徒には具体的な言葉での説明やメモを取ることが必要と考える。 ・1年次前期から後期で実施している実習を取り入れ、後期では2年次前期で実施する実習を取り入れ、体験実習が3回(2年前期、後期、2年後期)できるよう、1年次からより進路を意識した指導を行う。(他1) ・進路決定の優先順位を付けるに当たって評定というものがわからない分、何か基準となるものを明確にし、担当教師が答えられるように研修を行う。(他1) ・様式を変更する。 ・各々のセンターの担当者と相談する。	・キャリア教育は、小学部からの一貫教育である。 ・キャリア教育で大切なことは、能力、適性に合った指導を行うことである。 ・納税者になる意識を持たせる。 ・キャリアコーディネーターのプロに相談する。
		14	企業及び関係機関等との連携を密にした進路指導を行う。	3.1	22.9%	62.5%	12.5%	2.1%	・卒業前に、就労支援センターの支援員に就労先に同行してもらい状況を把握してもらうことができた。 ・今まで関係がなかった企業(新規)をたくさん開拓できた。企業、ハローワーク、就労支援機関と密に連携を取り合えた。今年度もハローワーク主催の会社の学校見学の機会を設けていただき、多くの企業の学校見学が頻繁にあった。本校と関係がある企業が、別の新しい企業を紹介してくれることもあった。(他1) ・部長及び副部長を中心に企業等関係機関との連携は取れた。	・数年後(未来)の本校のことを考えると、進路指導の仕事ができる人材を見つけ、育成することが大切であると思われる。	・人材の発掘・育成と人員を進路指導部へ配置する。	

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	自己評価					成果	課題	改善策	学校関係者評価委員意見		
				平均	4	3	2	1						
教職員の資質向上	学習指導力及び生徒指導力の向上	15	公開授業等を実施し、学習指導力の向上を図る。	3.1	24.5%	61.2%	12.2%	2.0%	・高等学校、特別支援学校の公開授業が実施され、両校の取組について知ることができたり、授業改善のヒントが得られたりした機会となった。(他1) ・高等学校と特別支援学校両方の授業公開の案内・アンケートなどの集計を行った。	・公開授業に参加しなかったが、時間割の関係で見学できないことがあった。 ・高等学校の先生方があまり特別支援学校へ見学にいられていないような気がした。(他1)	・公開授業週間の設定をもう少し長くして、見学しやすいようにする。(他1) ・研究授業の回数を増やす。 ・授業公開していることを今以上に周知する。	・公開授業は、校内だけでなく保護者、地域住民、連携企業にも参加してもらおうとよい。年間一人2回以上実施する。 ・教師は、生徒を育成するために自己を磨くことで成長する。 ・教師は、いかなる生徒にも教育をすることで成長する。		
	校内研修及び校外研修の実施	16	校内研修及び年次研修等を通じて、教職員全体の専門性の向上を図る。	3.2	30.6%	63.3%	6.1%	0.0%	・校内研修を行い、専門性の向上を図れた。 ・伝達研修、ワークショップなどの両校で研修する機会もあった。					
特別支援学校のセンター的機能の充実	校外支援としての教育相談の充実	17	併設する高等学校のみならず、地域の小・中学校及び近隣の夜間定時制高等学校等、幅広い教育相談を実施し、支援や助言を機能的に行う。	3.0	24.5%	55.1%	16.3%	4.1%	・コーディネーターを中心に各学年の部員が情報共有ができた。 ・阪神昆陽高等学校の心のサポート委員会に出席し、特別支援教育の視点から情報提供・助言をすることができた。 ・高等学校から講師派遣依頼があった場合、内容や日程を調整して実施することができた。(他1) ・近隣校からの講演依頼が多くあった。	・外部の公的機関やサービスの活用がより必要になっている。 ・併設する高等学校以外への支援に手が回っていない。センター校がいびつになっている。 ・講師派遣での講演内容を充実させていく。 ・ノーマライゼーションの発表では、健常者、障害者という図式があり、もっと連続性の理解が必要である。 ・発達障害の生徒に対する授業での支援について検討していく必要がある。(通級による指導) ・共通ノーマライゼーションのあり方について検討が必要である。 ・特別支援学校の教師が高校生に授業をする機会はあるが、高等学校教師が特別支援学校の生徒に授業をする機会(かつてのチャレンジタイム)がなくなっている。 ・ノーマライゼーションの教材開発を進める。	・役所等のことも家庭課との連携を深める。 ・研修と情報収集を行う。 ・自閉傾向や精神疾患などは、特に連続性で捉えやすい内容なので、そのような学びを行う。 ・高等学校の通級による指導の授業の打ち合わせに参加して自立活動の取組について助言する。 ・共同ノーマライゼーション実施に向けての実行委員会の設置(本校組織)	・自己評価の「2」が16.3%と高い。センター的機能の取組が停滞しているのあれば、コーディネーターを特定の教師に偏らないようにする方法も考えられる。		
	ノーマライゼーション教育の推進	18	併設の高等学校の授業で講師として講演を行い、ノーマライゼーションの推進に取組む。	3.2	36.7%	55.1%	4.1%	4.1%	・特別支援学校の教師の専門性を生かし、ノーマライゼーションや対人援助の講師として指導することができた。(他1) ・ノーマライゼーションの講演を受講し、より自分と向き合った生徒の感想や意見を聞くことができた。		・ノーマライゼーションの授業資料が6年分蓄積されてきたことから、高等学校教師も資料をもとに実施する機会を検討する。 ・セルフノートをもとに、生徒の実態に応じたノーマライゼーションの教材開発を行う。			
危機管理体制の整備	危機管理意識の向上	19	危機管理マニュアルの活用や研修会の実施により教職員が危機管理意識の向上を図る。	3.4	40.8%	55.1%	4.1%	0.0%	・避難所運営マニュアルや水害学習が盛り込まれ、危機管理マニュアルが充実し、職員の意識が向上してきた。(他2) ・教職員が積極的な姿勢で多様な研修に取り組むことができていた。(他1)	・防災、危機管理に関する研修のため、午前中授業になった。	・長期休業中を有効に活用してできないだろうか。	・危機管理マニュアルは、実施しては改良していくことの繰り返し(PDCA)でなければならない。		
PTA活動	保護者との連携充実	20	主体的なPTA活動のため、保護者との連携を図る。	3.1	22.4%	63.3%	14.3%	0.0%	・活発な活動が行われていた。 ・連携を密に行えた。 ・定例のPTA理事会が行われた。					
教育課程	基礎・基本の定着と主体的な学習活動	21	個に応じた学習指導の充実	3.2	28.6%	67.3%	4.1%	0.0%	・個別の指導計画に、合理的配慮の欄を設けることができた。 ・個別の指導計画を見直し、ABCDの評価(結果)を取り入れた。このことにより、保護者に対して分かりやすい個別の指導計画になった。 ・個別の教育支援計画を作成し、保護者との個別懇談会で生徒の支援について話し合うことができた。 ・教師間で生徒の状況を共有して指導について話し合う環境づくりをした。	・個別の指導計画に記載した目標を意識した日々の授業ができないこともあった。 ・目標設定、評価(結果)について妥当性・信頼性を高めていく必要がある。 ・保護者だけでなく、本人にも個別の教育支援計画の内容を確認させる。私の学習計画では、担任と一緒に作成して懇談でも活用している。内容が共通している部分もあるので、今後、どのようにすればよいか検討する。 ・基本的な特性に関する情報、研修が必要である。	・個々の生徒の目標を、生徒にも意識させ、日々の授業の中で振り返る機会を設ける。 ・目標設定の方法、書き方について研修を行う。	・担任と生徒と保護者で検討するのが良い。		
	特色ある教育課程の編成	22	社会的自立をめざした教育課程	3.0	20.4%	63.3%	16.3%	0.0%	・生徒の実態に応じた教材の選定を実施した。また、教員のキャリア充実を目指した自主研修を行った。	・各教科、領域の目標等を学年を渡っての見直しが必要になってきている。 ・どうしても知識を教える授業になりがちである。	・研修日をグループ研修とし、教科のカリキュラムを検討する時間を設ける。 ・聞いて、見てプリントに記入させる時間を削り、ロールプレイ等、主体的・対話的な内容を積極的に導入する。	・教師の経験・知識と技能が最も求められる領域である。生徒の人生に大きな影響を与えるべく努力をお願いしたい。 ・自己評価の「2」が16.3%と高い。キャリア教育をどうしていくのかを検討する必要がある。また、離職がない指導が必要である。		
	総合的な学習の時間	23	創意工夫を生かした取組	3.2	26.5%	67.3%	6.1%	0.0%	・全学年で、昼休み後に取り組みめるようになった。 ・チャレンジタイム発表会は、これまでの取組の成果をまとめたり、発表するよい機会となっている。	・課題設定に問題があるのか、継続して取り組めない生徒もいる。	・本人・保護者と話し合う機会を多く持ち、生徒の実態に応じた内容を検討する。			
課題教育	阪神昆陽高等学校との交流及び共同学習	両校の共同体制の構築	24	交流及び共同学習に係る委員会等を実施し、両校職員の共通理解を図る。	2.9	16.3%	63.3%	18.4%	2.0%	・合同の行事を実施できた。	・両校の一体感を、強めていく必要がある。(他2)	・交流及び共同学習をどこをどのように一緒にするのが精選する。 ・共同学習にするためには、ペアワークやグループワークを多く取り入れた授業にする。 ・共同の学びを推進するためには、教師の意識を変える必要がある。(他1) ・次年度は生活体験発表会を同じ土俵で審査する。 ・Bタイプは放課後のみに実施するのはどうか。	・共同の学びでの強みは、両校が同じ敷地内にあることである。これを生かし切れていない。 ・何を学ばせるために、何をするかを、目的別に明確に整理する。この分野においては、是非とも日本No. 1を目指して欲しい。 ・特別支援学校と高等学校が一緒に学び、人として大切なことを学ぶことができるので、全国発信して欲しい。 ・まず、教師の意識を高める必要がある。教師の意識が高くなければ、生徒同士の交流も効果が上がらない。 ・効果がない取組はやめることも考える。やめるにはエビデンスが必要である。スクラップ&ビルドをしないと疲弊する。 ・共同の学びのそれぞれのタイプの違いや、両校の存在意義について整理する。	・人権教育は、全ての領域教科で行うべきである。
		共同の学びの拡充	25	両校生徒が共に学ぶ教科・科目や学習形態等について、研究等を進めながら、その拡充を図る。	2.8	8.2%	65.3%	26.5%	0.0%					
		共同の学校行事の拡充	26	校内で実施する行事だけでなく、芸術鑑賞会等、校外で実施する行事についても、両校共同で行うよう取組を推進する。	3.1	20.0%	66.0%	14.0%	0.0%					
	両校生徒による部活動の実施	27	同じ部活動において、両校生徒が、ともに練習等に取り組む、交流や相互理解を深める。	3.0	26.5%	53.1%	18.4%	2.0%						
人権教育	自己実現と共生をめざす人権教育の推進	28	人権学習を通じ、共生社会の実現に向け、男女の平等や異なる価値観に対する相互理解を図る。	3.3	30.6%	65.3%	4.1%	0.0%	・総務部を中心に人権学習の時間が設定された。 ・人権HRを中心に価値観の幅を広げる成果があった。 ・回数を重ねることで生徒の考えがまとまりやすかった。	・次年度以降、新入生を含め、どのように学習させるのか検討が必要である。	・次年度は早々から自己理解、自己受容教育の委員会を立ち上げるべきである。 ・人権学習以外の授業でも人権学習を取り組む。			
防災教育	防災学習及び防災訓練の充実	29	体験的な防災学習を含め、様々なケースを想定した防災学習や防災訓練を実施する。	3.6	57.1%	40.8%	2.0%	0.0%	・総務部を中心に防災学習の時間が設定された。 ・臨場感のある訓練で最初から最後まで助かる為の第一歩を考えられた。 ・回数が多く、初期避難行動がすぐにとれるようになった。 ・生徒も親しみやすい体験的な形ですめられた。(他1) ・避難訓練や防災学習に大きな進歩があった。	・生徒に高校生に混じってボランティアや研修に行かせたい。	・県教育委員会に本校生を推進してもらいたい。			